

第2部 余市町の現状

第1章 余市町のあゆみ

第2章 地勢と指標



第 1 章 余市町のあゆみ

本町には数多くの遺跡があり、この地で古くから人々が暮らしを営んでいたことを示しています。先史時代から現在まで、余市町の主なあゆみを振り返ります。

和暦	年	西 暦	で き ご と
縄文時代中期～後期			大谷地貝塚遺跡（国指定史跡）
縄文時代後期			西崎山環状列石（北海道指定史跡）
続縄文時代			フゴッペ洞窟（国指定史跡）
寛文	9	1669	シャクシャインの戦い勃発
文化	3	1806	柏谷喜兵衛がヨイチ場所を請負う
文政	8	1825	竹屋長七がヨイチ場所を請負う
安政	4	1857	ヨイチから稲穂峠までの道路完成
明治	2	1869	場所請負制度廃止。開拓使が余市詰役員派遣（浜中出張所）
	4	1871	旧会津藩士団の入植始まる
	8	1875	開拓使がりんごなどの苗木を黒川・山田の農民に配布
	12	1879	余市りんご「19号（緋の衣）」「49号（国光）」が結実
	16	1883	余市～蘭島間のトンネル開通
	33	1900	7月1日、1級町村制実施余市町となる。人口 7,482 人 戸数 1,225 戸
	35	1902	北海道鉄道株式会社経営の鉄道敷設、余市駅開設
	40	1907	小樽～余市間電話開通
大正	元	1912	東北帝国大学農学部農科大学附属余市果樹園（後に北海道帝国大学農学部附属果樹園）山田村に設置
	4	1915	町内 3 千余戸に電灯点灯
	9	1920	第 1 回国勢調査実施、余市町の人口は 16,809 人
昭和	4	1929	北海道水産試験場完成
	9	1934	大日本果汁株式会社（現ニッカウキスキー株式会社）創設
	22	1947	初の民選町長に坂本角太郎氏選出
	25	1950	フゴッペ洞窟の岩面刻画発見、昭和 28 年に国指定史跡となる
	29	1954	上水道工事一部完成、供用開始
	33	1958	余市町立天然水族館開館
	37	1962	8 月 3、4 日の大雨により町内大水害、大川橋流失
	40	1965	北星学園余市高等学校開校
	46	1971	海上自衛隊余市防備隊開隊
	47	1972	笠谷幸生選手、冬季五輪札幌大会 70m 級純ジャンプで金メダルに輝く
	48	1973	余市町民憲章制定
	63	1988	英国スコットランド・ストラスケルビン市（現イーストダンバートンシャイア市）と姉妹都市提携の調印
平成	3	1991	余市町図書館開館。北海道余市養護学校開校
	4	1992	毛利衛氏スペースシャトル「エンデバー」に搭乗し、宇宙で科学実験を行う余市町名誉町民章贈呈
	10	1998	余市宇宙記念館開館 斎藤浩哉・船木和喜選手、冬季五輪長野大会で金メダル獲得
	12	2000	毛利衛氏、スペースシャトル「エンデバー」に再搭乗
	18	2006	あゆ場公園パークゴルフ場オープン
	21	2009	余市川浄水場（山田町）供用開始

第2章 地勢と指標

1. 自然環境

本町は、北海道北西部の積丹半島の基部に位置し、海岸部に拓かれたまちで、道央経済圏の一端に属しています。北は日本海に面し、東は小樽市、南は仁木町・赤井川村、西は古平町と接しています。面積は140.60km²であり、北海道の総面積83456.87km²の0.17%に相当し、道内179市町村の150番目となっています。（面積は平成23年北海道統計書より）

気候は、日本海を北上する対馬海流（暖流）の影響により、道内では比較的温暖な気候となっています。気温は、年平均8℃前後ですが、日中が高温で夜間は冷涼という1日の寒暖の差が大きい特徴があり、これが果樹の栽培に適した気候条件となっています。風は、南西の風が多く風速2m/s前後とそれほど強くなく、降水量は年間1,400mm程度、降雪量は年間800cmと、道内では比較的多いほうとなっています。

町内には余市川・ヌッチ川・登川・畚部川等が縦断しており、その流域に市街地が形成されています。また、周囲は三方を緩やかな丘陵に囲まれており、市街地周辺の地味肥沃な土壌に、果樹園・野菜畑を中心とした農地が広がっています。

北北東及び東北東に延びる海岸線は17kmにも及び、沿岸には地方港湾の余市港と4つの漁港があり、温暖な気候と相まって、古くから格好の漁場となっています。

また、道都札幌市から58.1km、ニセコ積丹小樽海岸国定公園の一部にもなっており、美しい景観に恵まれた海岸線や河川流域は観光価値も高く、さらには遺跡等の文化財など数多くの資源があります。

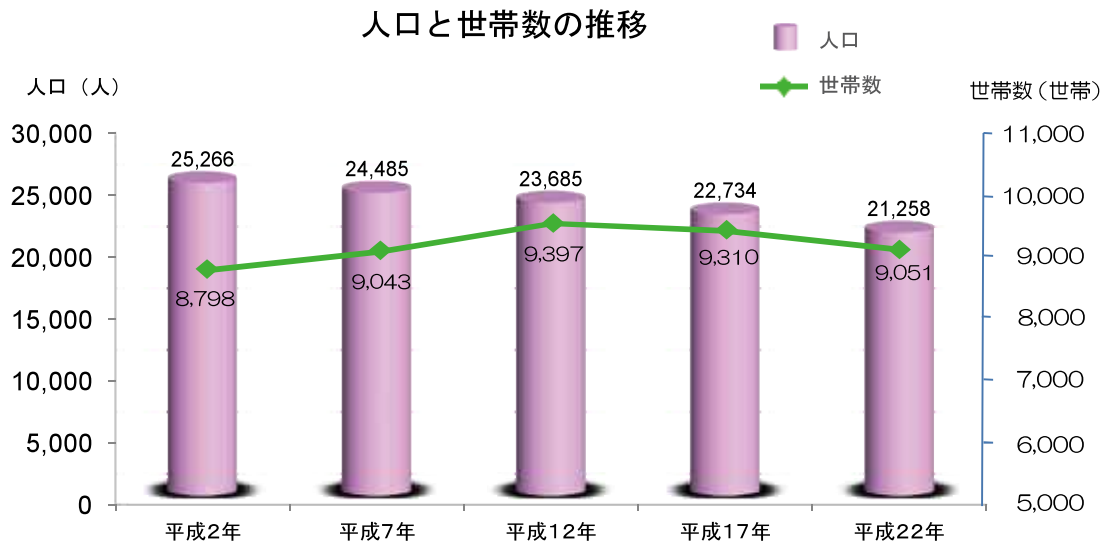
2. 人口と年齢構成

（1）人口の推移

本町の人口は、小樽市を除く後志管内19町村の中で最も多く、平成22年の国勢調査では21,258人となっていますが、昭和35年の28,659人をピークとし、近年においても減少傾向にあり、この10年で2,427人の減少となっています。

これは、出生率の低下に起因するものであると推測されますが、若者の進学・就職を目的とする町外への流出も主たる原因の一つであり、本町の高齢化にも一層の拍車をかけています。

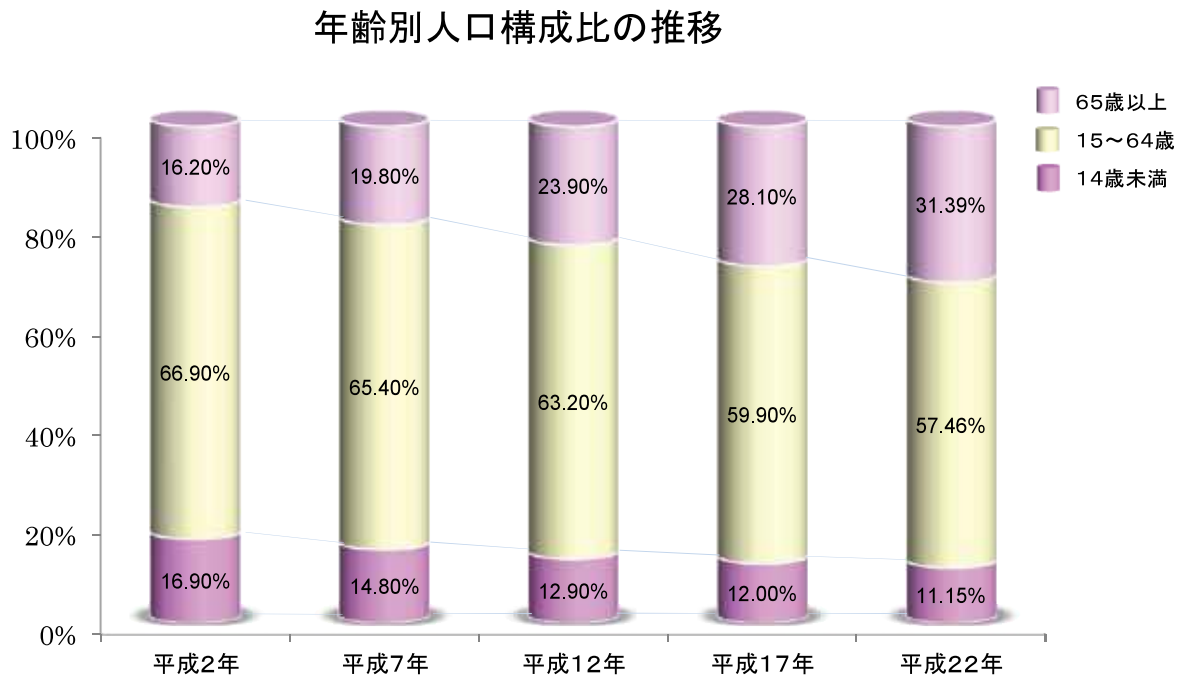
また、世帯数は、この10年で346世帯の減少となっています。



〔国勢調査〕

(2) 高齢化率

本町の65歳以上の高齢者人口は6,672人（平成22年国勢調査）で、高齢化率は約31.4%となっており、全国・全道と比較しても、非常に高い数字を示しています。



〔国勢調査〕

(3) 児童生徒数

本町の児童生徒数は、少子化の影響により全体的には年々減少傾向にあります。このような社会情勢の中で、職場の制度改革や保育所の充実、教育方針の充実を図ることにより、安心して出産・子育てのできる環境づくりが必要となっています。

児童生徒数の推移

		平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
保育施設	施設数	3	3	3	3	3
	児童数	138	125	115	106	121
	職員数	22	20	21	21	21
幼稚園	園数	3	3	3	3	3
	児童数	286	267	276	288	283
	教員数	21	21	20	23	23
小学校	学校数	6	5	5	5	5
	児童数	1,147	1,081	1,054	1,021	1,004
	教員数	84	75	75	76	71
中学校	学校数	3	3	3	3	3
	児童数	581	589	571	577	539
	教員数	53	54	53	51	49
高等学校	学校数	2	2	2	2	2
	児童数	493	411	378	371	464
	教員数	50	50	45	43	47

[学校基本調査 (保育施設は町民福祉課調)]



2. 経済環境

(1) 就業人口

本町の15歳以上の就業者数は、10,243人(平成17年国勢調査)であり、産業別にみると、第一次産業1,568人(15.3%)、第二次産業1,990人(19.5%)、第三次産業6,677人(65.2%)となっています。

基幹産業である農漁業をはじめとする第一次産業の就業者数は、年々減少しており、恵まれた自然環境を活かした生産性の高い第一次産業の確立と新たな人材の育成がこれからの課題です。第二次産業については、ほぼ横ばいで推移していますが、なかでも公共事業等に伴う建設業や農水産物を利用した加工・製造業への就労が高い割合を示しています。

また、第三次産業の就業比率は、年々増加の傾向にありますが、これは卸売・小売業、飲食店等の商業分野が一定の高い就業比率を維持していることや、サービス業就業者の増加によるものと考えられます。



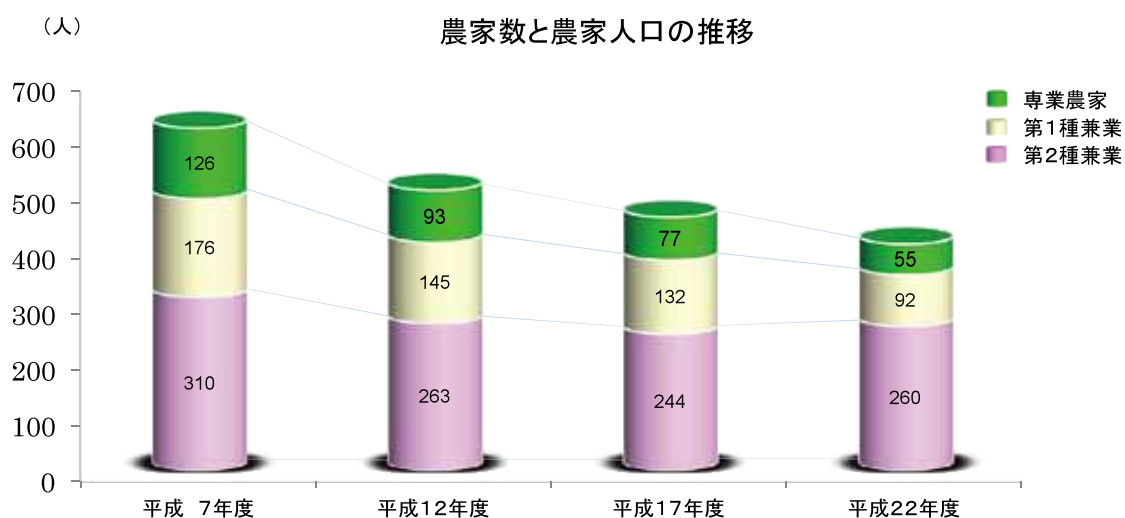
〔国勢調査〕

(2) 農業生産高

農業は、本町の基幹産業であり、その振興は町の活性化に直結します。

平成22年の世界農林業センサス等によると、農家数407戸、農家人口909人、耕地総面積1,006haとなっていますが、農業の全国的な低迷傾向は本町においても例外ではなく、農家数・農家人口・耕地面積のいずれも年々減少傾向にあり、農業従事者の高齢化や後継者不足という問題を抱えています。

これらを踏まえ、活力ある農業経営体と人材の育成を図るとともに、生產品のブランド化・6次産業化等の農業振興策に積極的に取り組まなければなりません。

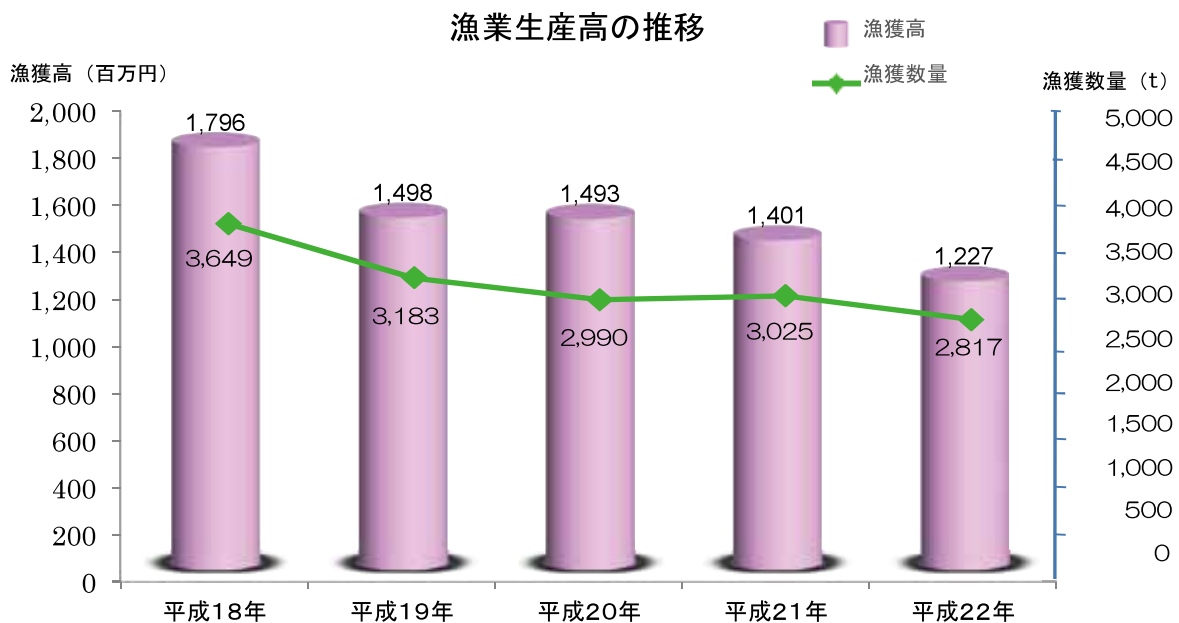


[世界農林業センサス]

(3) 漁業生産高

農業とならび本町の基幹産業である漁業については、さけ・たら・かれい類やいか・えび等が生産の多くを占め、平成22年の余市町漁業生産高報告書によると、全体では漁業生産量約2817t、漁業生産高約12億2,700万円となっておりますが、近年の海洋環境変化に伴う水産資源の減少や、農業と同様の後継者不足等の影響により、厳しい現状に立たされています。

今後は、とる漁業からつくり育てる増養殖型漁業への転換を図るとともに、漁場の造成及び資源管理の充実を図り、安定した生産性のある近代的漁業の振興に努めながら、漁業経営基盤の強化に取り組まなければなりません。



[余市町漁業生産高報告書]

(4) 工業生産高

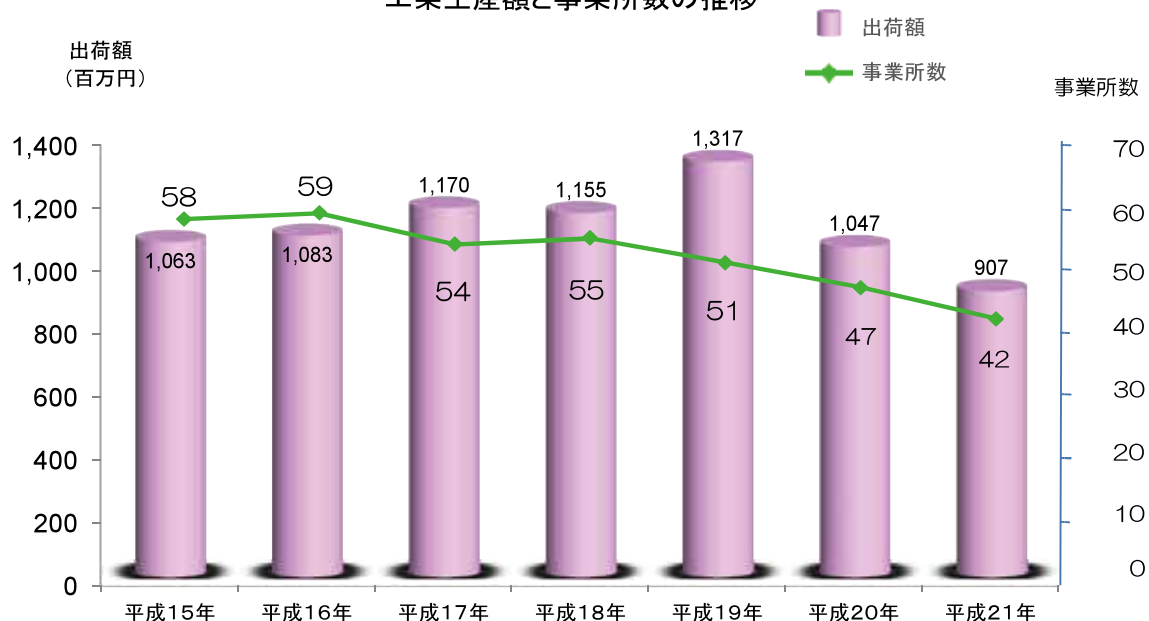
平成21年の工業統計調査では、本町は事業所数42件、従業者数687人、製造品出荷額は約9億円となっており、そのうち全従業者数及び全製造品出荷額の8割以上を食料品製造業が占めています。

このように、本町の工業の主流である食料品製造業については、豊富な漁獲量を背景とした水産加工部門を筆頭に、余市名産のりんご・桜桃等を利用した農産加工部門、果実や良質の水を利用した酒造部門など、町の産物や気候風土を活用したものが多く、6次産業化への可能性をもった特色ある工業形態となっています。

しかしながら、近年、本町の工業は全般的に低迷傾向にあり、製造品出荷額だけではなく、事業所数・従業者数についても減少しています。

工業の振興は、地域における就業機会の拡大や安定した雇用等に大きく影響し、地域経済の発展にとって重要な要素であるため、関係機関・企業との連携のもと、より一層活性化に取り組む必要があります。

工業生産額と事業所数の推移



[工業統計調査]

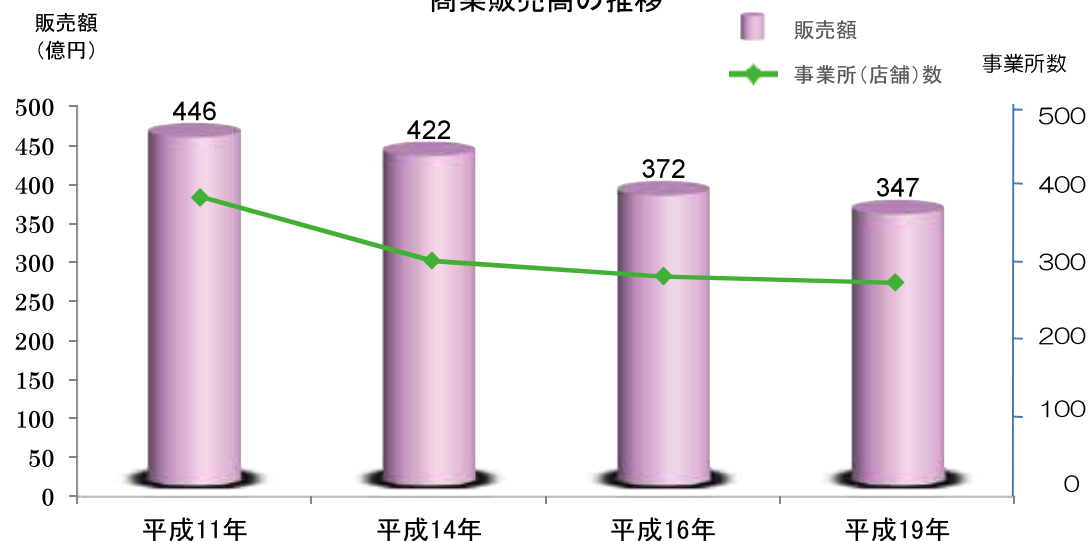
(5) 商業販売高

平成19年の商業統計調査では、本町は店舗数284店、従業者数1,861人、年間商品販売額約347億円となっています。

過去4回の同調査の数字と比較すると、従業者数はほぼ横ばいですが、販売額は平成3年をピークに減少傾向にあり、店舗数にいたっては、10年間で55店(16.2%)もの減少を示しています。

これは、消費者ニーズが多様化・高度化するとともに、モータリゼーションの進展等により大型店やコンビニエンスストアが進出するなど、小売業の環境が大きく変化したものと推測されます。

商業販売高の推移

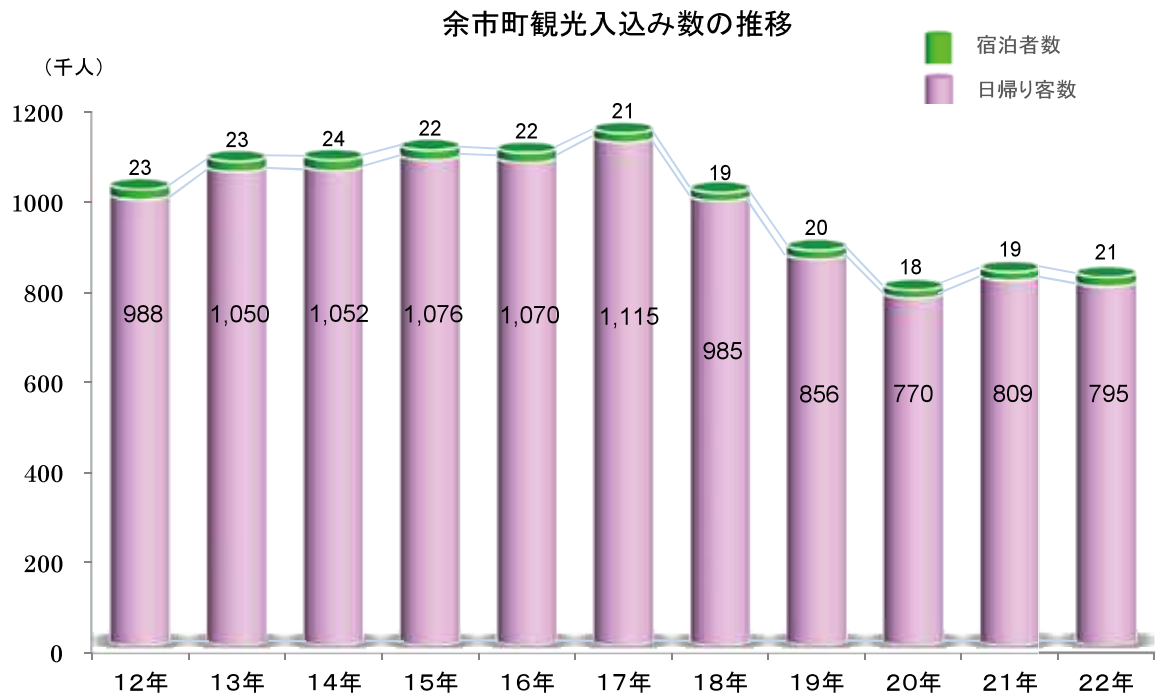


(6) 観光入込み客

本町には、「ニセコ積丹小樽海岸国定公園」に属する美しい自然や、町の観光施設を代表するニッカウヰスキー北海道工場・余市宇宙記念館、町の貴重な文化財施設であるフゴッペ洞窟・余市水産博物館・旧下ヨイチ運上家・旧余市福原漁場など、さまざまな観光資源があります。

これらの観光資源には毎年多くの観光客が訪れており、また、新たな観光ポイントの設定により、その数は増加傾向にあります。

しかしながら、その内訳をみると、季節により観光客入込み数の変動がみられることや、大半が通過型の観光形態となっている傾向が表われています。今後は、近隣市町村との連携を図りながら、広域的な観光産業を振興し、通年型・広域滞在型観光の可能性も探っていく必要があります。



[町経済部商工観光課調]

